

1

こんなまちで

子どもは人間になれますか？



大人がながめる緑ばかり



コンクリートに囲まれて育つ



子どもの手を離して歩くことさえできない



公園には土も水も草もない



車はスイスイ、歩行者はガタガタ



道を歩くと「危ない」「走っちゃだめ」と大声で怒ってばかり。
外へ出ると疲れます。



マンションで下の階から「子どもの足音がうるさい」と苦情を言われます。
静かにさせるために朝からビデオを見せてじっとさせています。

毎日外遊びに連れていきますが、夏は、公園は日陰もなく、
滑り台はヤケドするぐらい熱くて使えません。



3歳の子がマンションの周りを三輪車で走っていたら、
「うるさいからやめさせろ」と匿名で自宅に電話がありました。

保育園の横を通るとみじめな気持ちになります。

うちの子は、泥んこ遊びも水遊びもさせる場所がありません。

ベビーカーを押して歩いて、初めて車イスの方の気持ちがわかりました。

2 こんなまちでは子育てがづらい ～子育て中の親の声

問題提起

車に乗らず、まちを歩いて通るのは、主に子どもと高齢者です。自動車に乗って便利に快適にまちを走りぬける人がいる一方で、社会的弱者と言われる子どもと高齢者は、交通事故の危険性に常にさらされています。子どもたちは、学校の行き帰りに、自動車に排気ガスを吹きかけられ、クラクションを鳴らされ、猛スピードで真横を通り抜けられます。道も駐車場も、かつては人の居場所であり、子どもたちの遊び場でした。しかし今駐車場で子どもが遊ぶと大人に叱られます。交通事故によって障害を負う子どもや、命を奪われる子どもも後を絶ちません。

便利さと快適さ、景観的な美しさ、経済的な豊かさを優先するまちづくりから、生命を尊重し、安全と安心を最優先し、子どもが育つという視点のあるまちづくりへの方向転換が望まれます。

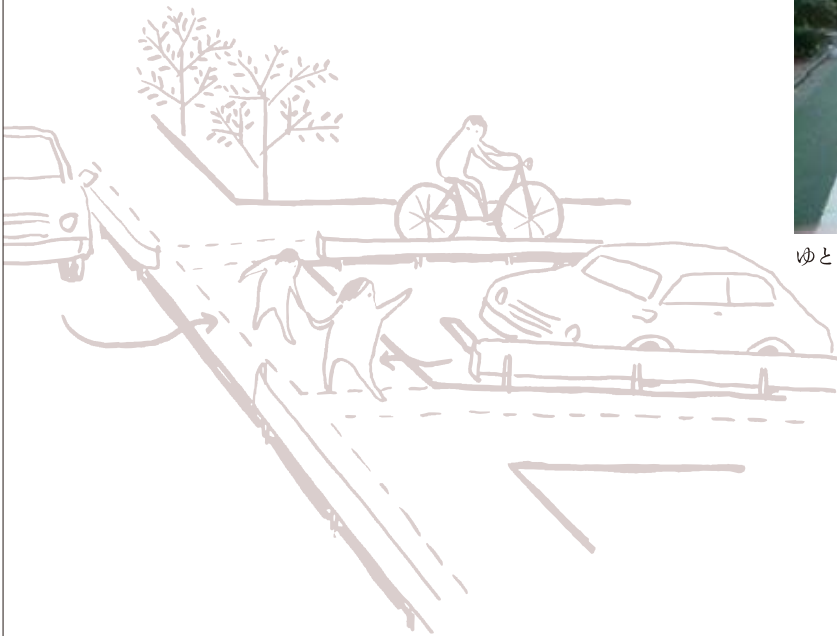
3 子どもが育つまちの条件

人の歩行空間が確保されている

住居地域においては、歩行空間を優先した道路づくりを行います。歩行者が安心して歩けるために、車が歩行者のすぐ脇を通らないだけの歩道幅を設け、自動車がスピードを落として走行する仕組みをつくります。歩道は、平坦な部分が1メートル以上という基準を設け、車椅子や双子用ベビーカーが通れる道路をつくります。歩道幅がとれない道路は、車道を1車線に減らし、自動車への徐行を促します。住居地域の歩道は色を変えて、ドライバーが住居地域を通過していることを、視覚的に認識できるようにします。歩道が車道よりも高くなっている歩道は、歩道部分の高さを揃え、自動車がスピードを落として、歩道の段差を乗り越えて通るようにします。横断歩道の手前・通学路の手前・住宅地域へ入る部分には、道路に盛り上げた部分を作り、自然に自動車の徐行を促します。



ゆとりのある歩道（東京都・文京区内）



自転車専用の走行空間がある

自転車は、環境に優しい乗り物ですが、歩行者にとっては危険な乗り物であり、ときに加害者側になることもあります。自転車の通行量が多い道路には、自転車用の専用通路をつくります。道路の幅が狭く自転車専用通路を設けることができない場合には、車道の両側を自転車優先と歩行者優先に分けます。通学手段として自転車が多く利用されている高校・中学校の周辺は、自転車の走行空間を優先的に設け、学生の命と歩行者の安全を守ります。

子どもがふれあえる自然（水・砂・土・雑草・木）が 小学校区内にある

まちには、大人がながめるための緑は多くありますが、子どもがふれあい、遊びに使うことができる緑は少ないものです。大人が景観として楽しむ噴水はあっても、その水を使って子どもが遊ぶことは禁止されている場合も少なくありません。子どもが歩いていける範囲（小学校校区内）に、自然とふれあえる場が必要です。子どもが育つ地域環境として自然環境を保証します。



公共施設前に子どもの遊び場（福津市・ふくとびあ）



自然とかがわることができる公園（世田谷区・羽根木プレーパーク）

子どもが思い切り体を動かし 安心して遊べる場が小学校区内にある

子どもが健やかに育つためには、のびのびと身体を動かして走り回る空間が不可欠です。子どもが歩いていける範囲（小学校校区内）に、体を十分に動かして遊ぶことができる場を確保するようにします。

道路に面した公園は、交通事故の危険性から、親が安心して幼児を遊ばせることが難しいものです。幼児向け遊具の置かれた公園は、道路に面した部分に、柵または低い街路樹を植え、幼児の道路への飛び出しを防ぎます。

また、人の視線が多い場所は、子どもが犯罪の危険から守られ安心して遊ぶことができます。市役所・健康福祉センター・高齢者施設・図書館などの公共施設の周囲は、駐車場を減らして芝生や遊具を整備し、子どもたちと見守る大人たちが和やかに過ごせる遊び場・交流スペースにするようにします。

子どもにあたたかいまなざしがある

子どもへあたたかいまなざしを注ぐことは、ハードの整備のなかで可能になることも多いものです。コンクリートの殺伐としたまちでは、子どもの遊び声が過剰に反響し、住む人の心も殺伐としてしまいます。単に景観が美しいだけでなく、人にとって居心地のよいまち並みが増えるとき、外へ出る子どもも大人も増え、つながりやかかわりも自然に生まれてくることでしょう。



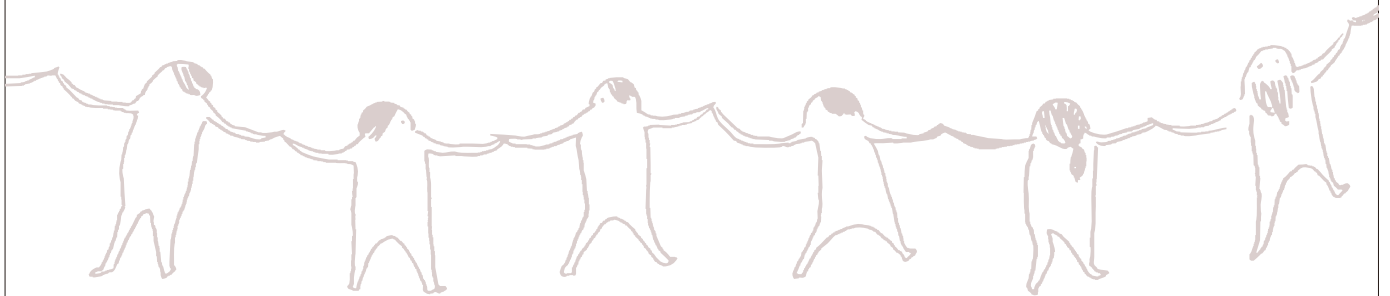


4 わたしたちの願い

かつて子どもたちは、地域のなかで、自然と出会い、多様な人と出会い、さまざまな体験をすることができました。地域は、子どもが育つ環境として、学校や家庭とは違う機能を果たしてきました。しかし、このような機能は、まちのハードが変化するとともに失われようとしています。

一見きれいなまちのなかに、孤独な子育てをしている母親たちがいます。友だちと遊び場を探す子どもたちがいます。コンビニの前にはしか集まらない中高生がいます。一日中テレビを見ている高齢者がいます。

「子どもを育てる環境」としてまちづくりを見直せば、きっとそこに住む大人の暮らしも変わってくることでしょう。子どもが育ち、人の居場所があるまちづくりを、わたしたちは待望しています。

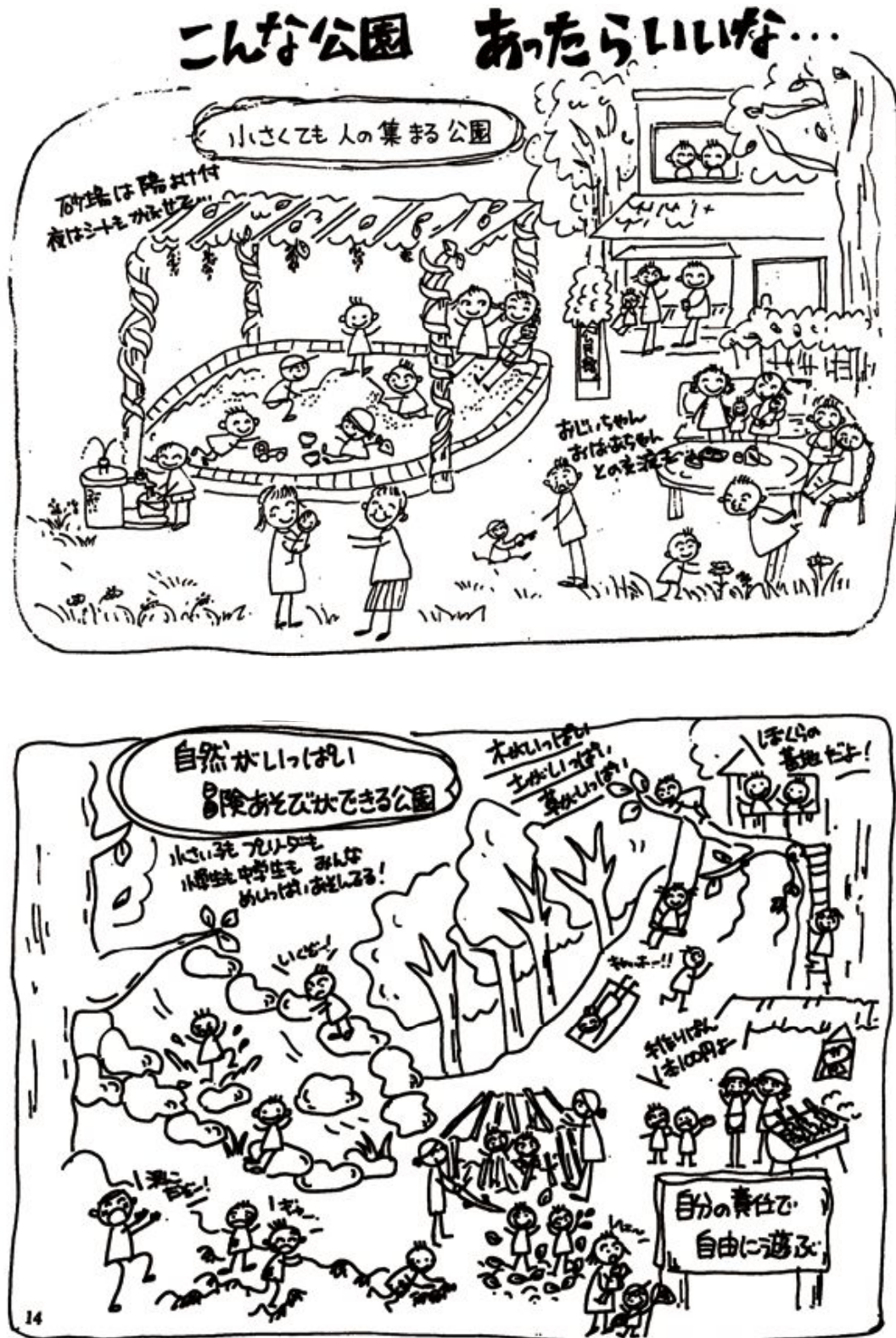


補足資料

子育て中の親による公園デザイン（乳幼児を子育て中の親へのアンケートとワークショップの内容をイラスト化）

わいわい子育てトーク報告書「子育てしやすい町ってどんなまち」P14

地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 平成 11年 11月発行



第4回夢アイデア応募作品

タイトル：子どもが育つまち、対象地：-、分類：子育て環境